

雪と氷柱

本田 禎子 北海道

夜空よりシヤラシヤラシヤラ降りきたる物体怖しこれは何物
すさまじき音に夜空を見上ぐれば雪と氷柱が共に降りくる
積雪に軒の氷柱は堪へきれず落下したるか雪もろともに
見せる人なけれど飾る玉子雛わたしと共に三つの代生きて
さくら餅くるめる伊豆の桜の葉放つかをりに伊豆をば偲ぶ

はなびらの冷え

金子 智佐代 茨城

み枢にめつむる君の白きほほ息ひとつ呑み「純ちゃん」と呼ぶ
なきがらの君に捧ぐる白百合の体温のなきはなびらの冷え
かなしみもくるしみも入る隙間なき花と君とのひつぎ閉ぢたり
うら若き喪主は語れり「やまひ得て、母はいのちを歌をふかめた」
画集繰るゆふべ遇ひたるフェルメールの少女の瞳 君が顕ちくる

点字ブロック

渡 辺 南央子 茨城

溶けかけて泣き貌となる雪だるま住宅展示場に佇ちて人るず
鳴き砂のやうな残雪踏む白昼^{まひる}声をもたざる蝶もつれ翔ぶ
一夜限りの雪ぐも去りてすこしづつことば表はす点字ブロック
冬の百合開花なかばに力尽きふたたび想ふ友の若き死
生き急ぐ身体にこころ追ひつかず半熟玉子を剥く雪のあさ

スノームーン

上野隆紘 千葉

「黙煙」と大書の貼り紙掲示するオフィスビルの喫煙ブース
コロナ禍に消えてゆくものまたひとつ喫煙室の談笑風景
山好きの妻に付き合ひ海好きのわれも見えてゐる「につぼん百名山」
足止めてねざらひくるる老女あり寒風つきて歩いてをれば
頻尿にも余得のありて午前二時目ざめて仰ぐ二月の満月を

こなから酒

黒岡美江子 千葉

ふるさとの訛り聞ゆるカーリング観つつ老夫とこなから酒飲む
ハウスよりストーン押し出す嫌がらせカーリングとは冷たい女
全画面あをぞらとなり翔ぶ鳶はスノーボー離さぬ平野歩夢ぞ
南高梅ひとつ乗せたるあつあつのご飯と糠漬け昨日も明日も
久慈さんの歌にありたる姫莎草を凶鑑にさがすあああの草か

若沖の鶴

岩崎佑太 東京

新年のうすくらがりに見つめればたまごのごとし若沖の鶴
立春の夜はおもふなり一生ひとよに食ふたまごの数のおそろしさなど
月の夜かたみに覚めてみづを飲む祖母は冬の蝶のごとしも
地をおほふ落葉のなかにまぎれをらむ日に日に遠くなる祖母の耳
時間といふおほいなる耳すぎゆきてわれだけが歩く北風の街

春の野原へ

二 浦陽子 長野

集落の屋根を下界に遠ざけてバイパスは深き谷をわたれり
傍線部①に引かれた傍線がぐんぐんのびて春の野原へ
生徒みなマスクしてゐるわたくしもマスクしてゐるああ息苦し
雪ふかき雲雀ひばり沢橋ざはわたりゆくほんとに春は来るのでせうか
親田おやだすぎ相田あひだをみつつ新田しんでんといふ里をすぎ温田ぬぐたに着きぬ

痛みの記憶

鈴 木 千登世 山口

へつまといふやまとことばのふくらみを思ひ出づジェンダー論の中
夫人あり妻人はなし かたはうの脱げてしまひしサンダルのごと
へせんかすと打てばへ戦火へと変換すワープロの深き痛みの記憶
雨の音スマホに呼びぬ秘めやかに降る雨音はねむりをさそふ
ふつさりとむらさき匂ふ花びらの麝香スアイ連理トビ草といふ春ひかり

ゼロカーボン

百 留 ななみ 山口

赤き実あかきは小さき神なり朝まだき四王司山に万両の赤
黒煙くろえんを冬空へ撒くえんとつの白はさびしゑ水仙すいせんの白
有機物うきぶつすなはち生は炭素たんそなり雲にまぎるる葬りのけむり
目標もくひょうは脱炭素だつたんそ社会 われの骨、筋肉をなす炭素たんそなれども
ゼロカーボンゼロカーボン易きことなり二百年まへの暮しにもどれるならば

宙のうつし身

都 甲 真紗子 福岡

梅の花散らふかに見え雪はふる節分すぎし冷ゆる朝を
整理する書棚にありしソルフェージュまだ読める音符をしばらく辿る
心打つ伝記読みつつ夜は更けぬ暗夜を灯る列車ゆくがに
使ふなき小指の爪を伸しおくレットを剥ぐときの役目に
十代のわれにあらねど憧るるスノーボードの宙のうつし身

やじろべゑ

田 中 久 子 長崎

抽出しの底を削れば老人が若者になつたやうに滑らか
積雪のちぢみてゆけばその縁に梅花ばくわ黄連わうれん白き花さく
人道と車道を区切るブロックの上を小さなやじろべゑくる
ふはふはが転げきたりてコンクリの割れ目に入るタンポポの絮
自転車の前に吾を乗せスピードを出しても良いかと父は問ひにき

如月の蔵

梅 田 陽 介 熊本

麴室かうむろを出づれば玲瓏たる月を掲げ波打つ蔵の瓦は
自己愛の無き半生を思ふとき梅ふと香る我が姓の花
男系の名字を継がす「姓」はしかし「女」が「生」きると書くではないか
如月の蔵に喉をふるはせる搾つたばかりの酒を利くとき
人生を建てるが如く二世帯の家を建てたり不惑の年に